

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2022年 2月

「神のみかたちを回復する」「天の最高裁判所（II）」「黙示録18章の御使と1888年のメッセージ」
「だいこん餅」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「天の最高裁判所 (II)」

4

聖書の教え

朝のマナ

神のみかたちを回復する

8

Restoring the Image of God

現代の真理

「黙示録 18 章の御使と
1888 年のメッセージ」

37

Good Way Series- 正道 -

力を得るための食事

「だいこん餅」

40

レシピ

お話コーナー

「大いなる準備 (I)」

42

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

電話：0494-22-0465

【沖繩集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21

電話：0980-55-8136

発行日 2022 年 1 月 9 日

編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: iStock on Front page; Sermon View on page 48

アクセス www.4angels.jp

メール sdarm.shomaru@gmail.com

Printed in Japan

正しい始まり

教えられなければならない第一の教訓は、神へより頼むことの教えである。彼らがどの方面で成功するためにも、まず自分で、キリストのみ言葉の中の「わたしから離れては、あなたがたは何一つできない」という真理を受け入れなければならない。

正義は、神に対する深い信仰の中に根を下ろしている。どんな人間も、神を信じて、このお方と生きたつながりを維持しているとき以外は、正しくないのである。野の花がその根を土に下ろし、空気や梅雨や雨や日光を受けなければならないように。われわれも神から、魂の生命の必要を満たすものを受けなければならない。われわれは、神のご性質にあずかる者となって初めて、このお方の戒めに従う力を受けるのである。身分の高低、経験の多少によらず、だれでも、その生命がキリストと共に神のうちに隠されているのでなければ、人々の前に、純潔で力強い生涯を着実に維持していくことはできない。人々の間の活動が激しければ激しいほど、神との心の交わりは密接でなければならない。

出版所の従業員は、宗教的な面で教育されなければならないと主は指示を与えておられる。この働きは、財政的な利益よりも、計り知れないほど大きな重要性のあるものであって、働き人の霊的健康は第一に考慮すべき問題である。毎朝、祈りをもって、あなたの仕事を始めるために時間を取りなさい。これを無駄な時間だと考えてはならない。それは永遠を通じて残る時間である。この方法によって、成功と霊的な勝利がもたらされる。機械は、主のみ手によって動かされる。神の祝福は、確かに求めるだけの価値があるものであって、働きは始まりが正しくなければ、正しく行われ得ないのである。…

聖書を学ぶために、小さいグループで夕方、正午、あるいは早朝に集まりなさい。聖霊によって力づけられ、啓発され、きよめられるために、祈りの時間を持ちなさい。キリストは、すべての従業員の心のうちに、この働きがなされるように望んでおられるのである。…各自が自分の体験を単純な言葉で話しなさい。…キリストは、あなたの心の中にお入りになる。この方法によってのみ、あなたは、自分の高潔さを保つことができるのである。…

主を求めるために費やされる時間は浪費であると、多くの者が考えているようであるが、主が入ってこられて人間の努力と協力し、男女がこのお方と協力するとき、著しい変化が働きとその結果に見られる。義の太陽の輝く光に照らされた心は皆、声にも、考えにも、また品性にも、神の御霊の働きを表すのである。機械は、名人の手で油が刺され、導かれているかのように回転する。従業員の精神が、二本のオリブの枝から油を受けるとき、摩擦は少なくなる。…清い感化が他の人々に及ぼされるようになる。(教会への証 7巻 194-196)

第26課 天の最高裁判所(II)

裁判の手続き

天においては、記録の書がいくつか存在します。わたしたちのすべての行動、言葉、考えは、善かれ悪しかれ、忠実に記録されています。様々な書物とは以下の通りです。

1. いのちの書

神の奉仕に参加したすべての人々の名前が、いのちの書に記されます。これらの人々は、神の教会に加えられたのです。

「...しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名をしるされた者は皆救われます」(ダニエル 12:1)。

「しかし、霊があなたがたに服従することを喜ぶな。むしろ、あなたがたの名が天にしるされていることを喜びなさい」(ルカ 10:20)。

「...そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつながれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」(マタイ 16:19)。

「このいのちの書に名がしるされていない者はみな、火の池に投げ込まれた」(黙示録 20:15)。

2. 覚えの書

覚えの書には、すべての良い行い、勝ち取られたすべての勝利、克服されたすべての誘惑が記録されています。神を喜ばせたすべての行為は、報告を担当する天使たちによって誠実に記録されている。

「そのとき、主を恐れる者は互に語った。主は耳を傾けてこれを聞かれた。そして主を恐れる者、およびその名を心に留めている者のために、主の前に一つの覚え書がしるされた」(マラキ 3:16)。

「あなたはわたしのさすらいを数えられました。わたしの涙をあなたの皮袋にたくわえてください。これは皆あなたの書にしるされているではありませんか」(詩篇 56:8)。

「わが神よ、この事のためにわたしを覚えてください。わが神の宮とその勤めのためにわたしが行った良きわざをぬぐい去らないでください」(ネヘミヤ 13:14)。

3. 死の書

「見よ、この事はわが前にしるされた... 彼らの不義と、彼らの先祖たちの不義とを共に報い返す」(イザヤ 65:6, 7)。

「あなたがたに言うが、審判の日には、人はその語る無益な言葉に対して、言い開きをしなければならぬであろう。あなたは、自分の言葉によって正しいとされ、また自分の言葉によって罪ありとされるからである」(マタイ 12:36, 37)。

すべての人には、天使がついています。その天使たちは、わたしたちのすべての行動、言葉、考えに注目し、それらをこれらの書物の中に忠実に記録しています。サタンはわたしたちの罪をとりあげて、わたしたちを神のみ前で告発します。わたしたちの大祭司であり弁護人であるイエスは、わたしたちのためにとりなしを行う準備ができておられます。わたしたちが告白し、捨てるすべての罪は、死の書から除去されます。わたしたちの名前はいのちの書に残され、一方、わたしたちの善行は覚えの書は記録されます。もし、罪を悔い改めないならば、わたしたちの名前はいのちの書から除去され、わたしたちの罪が死の書に記録されたままになります。この問題は、わたしたちにとって最高の関心事となるべきであり、またわたしたちはイエスがわたしたちのために法廷で嘆願しておられる間に、恵みの御座へ行く決心をすべきです。今日、わたしたちは弁護をしていただくために自分の判決をあずける機会があります。弁護者がいなければ、わたしたちの判決は、告白されず、また嘆願なく閉じてしまうかもしれません。

裁きはいま進められており、それは調査審判と呼ばれています。なぜなら、すべての人の生活と裁判が、天の法廷で調べられているからです。執行裁判は、訴追手続きの後になされます。まず調査審判で、神に従ったすべての人の裁判が審査され、死者から始まります。

「さばきが神の家から始められる時がきた。それが、わたしたちからまず始められるとしたら、神の福音に従わない人々の行く末は、どんなであろうか。」(ペテロ第一 4:17)。

「また、死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立ってい

るのが見えた。かずかずの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた。」(黙示録 20:12)。

書物が開かれ、わたしたちの証拠が裁判官に提示されるとき、弁護してもらうために最も優秀な弁護人が必要になるでしょう。もし、わたしたちが個人的にイエスにわたしたちの事情を嘆願し、告白するのであれば、このお方は喜んでわたしたちの代理を務めてくださいます。しかし、そのような告白と嘆願は、法廷でわたしたちの判決が取り上げられる前になされなければなりません。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(ヨハネ第一 1:9)。

「勝利を得る者は、このように白い衣を着せられるのである。わたしは、その名をいのちの書から消すようなことを、決してしない。また、わたしの父と御使たちの前で、その名を言いあらわそう」(黙示録 3:5)。

「だから人の前でわたしを受け入れる者を、わたしもまた、天にいますわたしの父の前で受け入れるであろう」(マタイ 10:32)。

「しかし、人の前でわたしを拒む者を、わたしも天にいますわたしの父の前で拒むであろう」(マタイ 10:33)。

「まちがってはいけない、神は侮られるようなかたではない。人は自分のまいたものを、刈り取ることになる。すなわち、自分の肉にまく者は、肉から滅びを刈り取り、霊にまく者は、霊から永遠のいのちを刈り取るであろう」(ガラテヤ 6:7,8)。

裁判の執行

わたしたちの弁護人が罪人のためのとりなしの働きを終えられると、天の聖所を離れる前に、ご自分の仲裁が完了したことを宣言なさいます。

「不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」(黙示録 22:11)。

イエスが聖所から去られるとすぐに、神によって予め警告されていた裁きが、七つの災いが注ぎだされることによって、悪人たちの上に下り始めます。わたしたちの次のレッスンではいくつかにわたり、これらの終わりの時の出来事を説明し

ていきます。七つの災いの後、イエスは義人を贖い、すべての人にその行いに従って報いるために来られます。悪人の最終的な裁きの執行は、千年期の後（黙示録 20 章）に行われます。この点については、本課以降のレッスンで学びます。

ひとたび恩恵期間が終了しますと、わたしたちのために嘆願して下さる弁護人がいなくなります。イエスこそ唯一の仲保者ですが、裁きが閉じると、このお方は判決を執行なさいます。次のように記されています。

「なぜなら、わたしたちは皆、キリストのさばきの座の前にあらわれ、善であれ悪であれ、自分の行ったことに応じて、それぞれ報いを受けねばならないからである」（コリント第二 5:10）。

「神は、義をもってこの世界をさばくためその日を定め、お選びになったかたによってそれをなし遂げようとされている。すなわち、このかたを死人の中からよみがえらせ、その確証をすべての人に示されたのである」（使徒行伝 17:31）。

わたしたちの義務

わたしたちは皆、裁きに直面しなければならないことを考えるとき、恵みの御座のもとへ行くことは、わたしたちの特権であり、また義務です。今日、わたしたちは悪と不従順の道から向きを変えなければなりません。

「罪を犯す魂は死ぬ。子は父の悪を負わない。父は子の悪を負わない。義人の義はその人に帰し、悪人の悪はその人に帰する」（エゼキエル 18:20）。

「だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか。」（ヘブル 4:16）。

「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」（ヨハネ第一 1:9）。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ 3:16）。

神のみかたちを回復する

Restoring the Image of God



2月

霊とまことをもって礼拝する

反逆と誇りを捨てる

「神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまことをもって礼拝すべきである。」
(ヨハネ 4:24)

自己愛と利己的な野望は狭い門を通り、細く上に向かう道を歩むことはできない。最終的な清算の日には、神が一人びとりを名によって知っておられたことがわかるようになる。人生の一つ一つの行動に対して目に見えない証人がいる。「わたしはあなたのわざを知っている」と「七つの金の燭台の間を歩く」お方が仰せになる(黙示録 2:2,1)。どのような機会が軽視されてきたか、良い羊飼いであられるお方が曲がった道で迷っている者を探し出し、彼らを安全で平安な道に連れ戻すためになされた努力はどれほどたゆまないものであったかが知られる。神は何度も何度も快楽を愛する者に呼びかけ、彼らが自分たちの危険を知り、逃れることができるように、何度も何度もみ言葉の光を彼らの道に投げかけてくださった。しかし、彼らはますます、あたかも広い道を旅するようにふざけたり、冗談を言ったりしながら進んでいき、ついには自分たちの猶予の期間が終わってしまうのである。神の道は公正であり平等である。だから欠けていることが見出された者に宣告が下されるとき、どの口も閉じる。……

あなたが永遠の事柄に正しい評価をするとき、金持ちや学識のある者の友情や評価があなたに感化力を及ぼすことはない。どのような形であれ、おのずと現われる誇りは、もはやあなたの心のうちに生きることはない。(教会への証 5 巻 435)

なされるべき大いなる働きがある。心は忠実に探られなければならない。さもなければ、誇りと反逆がその内で支配するようになる。外の悪が内にある悪を目覚めさせる。そして魂は、自分自身の造った霧の中で迷いながら、いつも自分のクリスチャンらしくない一連の行為の結果を他の人のせいにするのである。

生ける御言がわたしたちの内に豊かに宿らなければならない。さもなければ、わたしたちは決して自分の心のうちで主なる神をあがめることができない。わたしたちは御言によって生きなければならない。そして、自分が神を愛しているのか、それとも自分のうぬぼれに夢中になっているのかを知るために、綿密に自分自身を吟味しながら、自己を制御しなければならない。恵みによって抑制されていない心はどれも裏切るものであり、滅びへと導く。(ビュー・アソッド・ヘラルド 1900年5月1日)

2月2日

捧げものにおける態度

「アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。日がたって、カインは地の産物を持ってきて、主に供え物とした。アベルもまた、その群れのういごと肥えたものを持ってきた。主はアベルとその供え物とを顧みられた。しかしカインとその供え物とは顧みられなかった。」(創世記 4:2～5)

〔犠牲の捧げものには〕大きく分けて二つの部類があった。アベルは祭司として自分の捧げものを厳粛な信仰のうちに捧げた。カインは自分の地の実を捧げたいと思ったが、自分の捧げものに獣の血を結びつけることを拒んだ。彼の心は獣の血を捧げることによって、罪の悔い改めと救い主を信じる信仰を示すことを拒んだ。贖い主の必要を認めることを拒んだ。彼の傲慢な心にとってこれは依存することであり、屈辱であった。

しかしアベルは未来の贖い主を信じる信仰によってカインよりもより受け入れられる犠牲を神に捧げた。彼が獣の血を捧げたことは、自分が罪人であり洗い流すべき罪が自分にあることを表明し、自分が悔い改め、未来の大いなる捧げものの血の功績を信じていることを表明した。サタンは不信仰、つぶやき、反抗の親である。彼は疑いと、罪を犯していない兄弟と神への激怒でカインを満たした。なぜなら彼の犠牲は拒まれ、アベルの犠牲は受け入れられたからである。……

犠牲の捧げものは、捧げられることになっていた大いなる捧げもの、すなわち獣の血で予表されていた捧げものを通して与えられる神の許しについて、人に対する永続的な誓約となるべく制定された。この儀式によって人は来るべき贖い主への悔い改め、従順、信仰を表した。カインの捧げものを神に対する侮辱としたのは、神のお定めになった儀式に対する服従と従順の欠如であった。彼は単に地の産物を神に捧げるという自分自身の計画の方が高尚であり、他への依存を示し、ひいては自分自身の弱さと罪深さを表明する獣の血の捧げものほど屈辱的ではないと考えた。カインは贖罪の血を軽んじた。(レビュー・アンド・ハラト' 1874年3月3日)

カインの精神を避ける

「カインは弟アベルに言った、『さあ、野原へ行こう』。彼らが野にいたとき、カインは弟アベルに立ちかかって、これを殺した。」(創世記 4:8)

不法がはびこるので多くの者の愛は冷える。キリスト再臨の信仰を失っている者が多くいる。彼らは世のために生きており、「主人の帰りがおそい」と心の中で言っており、そう願いつつ仲間の僕を打ちたたいている。彼らはカインがアベルを殺したのと同じ理由のゆえにこれを行う。アベルは神が与えておられた指示に従って神を礼拝する決心をしていた。これがカインを不快にした。彼は自分自身の計画が最高であり、主は妥協して彼の条件を受け入れると考えた。カインは自分の捧げものの中にキリストへの依存を認めなかった。自分の父親アダムはエデンから追い出されることで厳しく取り扱われていると考えた。思いの前にその罪を常に保つという考え、自分の外にある権威への完全な依存の告白である、殺された小羊の血を捧げることは、カインの誇り高い精神にとって拷問であった。長子として、彼はアベルが自分の模範に従うべきであると考えた。聖なる火が犠牲を完全に焼き尽くしてアベルの捧げものが神に受け入れられたとき、カインの怒りは非常に大きくなった。主は彼に事態を説明するためにへりくだられたが、彼は神と和解しようとせず、神がアベルに好意を示されたので彼を憎んだ。彼は非常に怒って自分の兄弟を殺した。

主は、自分たちの不信仰と疑いによって、自分の主人の帰りは遅いと言ってきたすべての人々、そしてその僕仲間を打ちたたき、酒飲み仲間と食べたり飲んだりしている(彼らとまさに同じ原則で働いている)すべての者と争われる。彼らは酔っている、しかし酒のゆえではない、よめく、しかし濃き酒のゆえではない。
.....

人が神から離れ、それにより彼の心は聖霊の支配する力の下にいなくなるや否や、サタンの属性が現れ、自分の仲間を圧迫し始める。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1900年3月21日)

2月4日

わたしの兄弟の番人はだれか

「主はカインに言われて、『弟アベルは、どこにいますか』。カインは答えた、『知りません。わたしが弟の番人でしょうか。』」（創世記 4:9）

貪欲と利己心を伴った世的な精神が、多くの者を支配している。それを持っている者は自分自身の特別な関心を見張っている。利己的な金持ちは、いかに隣人の不利を自分が有利に用いられるかを研究するためでないかぎり、隣人の事柄に関心を示さない。人のうちにある気高さと神に似たものは利己的な関心のために手放され、犠牲にされている。金銭への愛着はすべての悪の根源である。それは視力を盲目にし、人を神と隣人に対する自分の義務を識別するのを妨げる。

ある者は、自分たちがときおり牧師や真理の前進のために進んで寄付をするので、自分は気前が良いとうぬぼれているが、これらのいわゆる気前の良い人々は、取引においてきめが細かく、だし抜く準備ができています。彼らはこの世のものを豊富に持っており、これは彼らを神の管理人として大きな責任に結びつける。しかしながら、貧しい勤勉に働く兄弟との取引のとき、彼らは一銭にいたるまで厳密である。取引に対して貧しい側の立場が、貧しい人の遺産である。貧しい兄弟に好意を示す代わりに、鋭敏で厳密な金持ちはすべてを有利に用いて、すでに蓄えている富を他人の不運によって増し加える。彼は自分の利口さを自慢するが、自分の富をもって自らの上に重いのを積み上げ、自分の兄弟の道につまづきの石を置いているのである。

真実で気高く私心のない善意を、金持ちの中に見出すことは非常にまれである。彼らは富への野望の中で、人類の当然の要求を見落とす。彼らは、おそらくは自分たちと同じくらい一生懸命働いてきた貧困のうちにいる自分たちの兄弟の窮屈で好ましくない立場を認めることも感じることもできない。彼らは、カインのように「わたしは兄弟の番人でしょうか」「わたしは自分が持っているもののために一生懸命働きました。わたしはそれをしっかりとつかんでいなければなりません」と言う。「兄弟の悲哀を感じるよう助けてください」と祈る代わりに、彼らの絶え間ない研究課題は、兄弟には悲哀があり、自分たちの同情や惜しみない心に対して要求する権利があることを忘れることである。（教会への証1巻 479, 480）

カインでなくキリストの方法を選ぶ

「わたしたちは互に愛し合うべきである。これが、あなたがたの初めから聞いていたおとずれである。カインのようになってはいけない。彼は悪しき者から出て、その兄弟を殺したのである。なぜ兄弟を殺したのか。彼のわがが悪く、その兄弟のわがは正しかったからである。」(ヨハネ第一 3:11,12)

カインの精神、すなわち同胞を告発し、有罪を宣告し、獄に入れ、そして死刑に処するよう人々を導く精神が、わたしたちの世界にますます増大している。神のはっきりとした戒めの違反は、自分の同胞を傷つけるようにとのサタンを精神を吹き込まれている。なぜなら彼らは宗教上の信念で意見を異にするからである。彼らは人の手による律法を制定し、自分たちの残酷な発明によって、自分自身がしているかのように、人々にむりやり神を冒瀆させようとしつつ、神の律法を無視する。しかし彼らはこれをする権利を与えられてはいない。宗教が異なるがゆえに自分たちの同胞に苦痛や死の判決をくだす者は、もし彼らが違反を続けるなら、ちょうど同じような判決を自分たちにくだすことになる。彼らは自分たちの働きによって、キリストが初臨されたときのように、再臨のときにもこのお方を拒み、死刑にするという証拠を担う。……

罪はサタンの属性であり、常に善に敵対して団結する。カインの精神はすべての偽りの宗教において明らかである。サタンの働きは非難し滅ぼすこと、人の自由を取り去り、彼の命を滅ぼすことである。違反は常に人々をサタンの代理人として行動させ、神と義に敵対する目的を行うようにと導く。

キリストは、ご自分の働きは回復し、道徳的に高め、平和と幸福をもたらすことであるとナザレでお告げになった。このお方は御父を表すためにこの世に来られ、死人に命を与えることによって、病人と苦しむ者に健全と健康を回復することによってご自分の神の力をあらわされた。このお方はこの世における命の木のようであられた。(サイズ・オブ・ザ・タイムズ 1900年3月21日)

信仰は愛によって働き、魂を純潔にするときだけ本物である。自己は十字架につけなくてはならない。さもなければ全存在が汚れたままである。カインの精神が心に入るのを許してはならない。なぜならそれがもたらす憎しみは最近親者を殺すことになるからである。(ユース・インストラクター 1899年9月21日)

2月6日

悔悟の犠牲

「信仰によって、アベルはカインよりもまさったいけにえを神にささげ、信仰によって義なる者と認められた。」(ヘブル 11:4)

ほとんど向上していない多くの者は、慢心し、へつらいを熱望し、第一にして最重要視されないと嫉妬する。そして、彼らは自分が他の人々に勝っているという感情を大事にする。しかし天が尊いものとして受け入れるのは、最もへりくだって働く者、神への感謝の気持ちで満たされている者、またアベルの捧げもののように自分の働きを芳しいものにする原則を、自分のなすすべてのことに織り込む者である。……

ぶどう畑で働く者よ、あなたの携わっている働きを神に受け入れられるものとするのは、それに携わる時間の長さではない。そうではなく、労していることに対する自発的な心、忠誠、誠心である。ユダヤ人はぶどう畑に最初に召された。しかし彼らは高慢でひとりよがりであり、彼らがまったく軽蔑していた異邦人が、神の王国の事柄において彼ら自身と同じ特権にあずかることで不快になった。ユダヤ人を何よりも怒らせたのは、使徒たちが、異邦人を探し求め、福音の光に導き入れるべきだと公表したことであった。労働者のたとえばユダヤ人が異邦人に対して行ったのと同じ精神を大事にすることがどれほど罪深いものであるかを示している。イエスは教会に最初に召された人々に、競走の精神は彼らの間で見出されてはならないと警告された。……

弟子たちの間には自己満足、自己称揚の精神があり、自分たちの間で比べあっていた。もし彼らのうちのだれかが目立って失敗をするなら、他の者は優越感に浸った。イエスは抑制しなければならない精神が入ってくるのをご覧になった。このお方は人の心を読むことがおできになった。そして、「何がいただけるでしょうか」という質問の中にある彼らの利己心の傾向をご覧になった。このお方はこの悪が巨大な規模になる前にそれを正さなければならない。弟子たちは福音の真の原則を見失う危険があった。……報いは働きによるのではない。だれも誇ることがないように、それはまったく恵みによるのである。(レ・ビュー・アンド・ハラルド 1894年7月10日)

神の聖なる人

「信仰によって、エノクは死を見ないように天に移された。神がお移しになったので、彼は見えなくなった。」(ヘブル 11:5)

エノクは聖なる人であり、一心に神に仕えた。彼は人類家族の墮落を悟り、カインの子孫から分離して、彼らの大いなる邪悪のゆえに彼らを譴責した。地上には、神を認め、このお方を畏れて礼拝している者がいた。しかし義なるエノクは、不信心な者の増し加わる邪悪に非常な心痛を覚え、彼らと日ごとに交わろうとしなかった。それによって彼らの不信心に影響を受け、自分が神の高貴なご品性に当然与えられるべき聖なる崇敬の念をもって、このお方を常に尊敬しないことがありはしないかと恐れたのであった。彼の魂は、彼らが日々神の権威を踏みこじらるのを見て苦しんだ。彼は彼らから離れ、熟考と祈りに捧げつつ、寂しい所で多くの時間を費やした。彼は神のみ前で待ち、このお方のみ旨をもっと完全に知り、それを実行できるようにと祈った。……

みずからを世から離し、祈りと神との交わりに多くの時間を割いていた。エノクは、終わりの時代に世から離れている神の忠実な民をあらわしている。地上に不義は恐ろしいまでに広がるであろう。人々は自分たちの墮落した心のおもむくままに従い、自分たちの惑わせる哲学を実行し、崇高な天の権威に反抗するのをあきらめる。……彼らはエノクのように天に移されるのにふさわしくなる。彼らは世を教え警告しようと努力するかたわら、不信心者の精神や習慣に合わせず、自分たちの聖なる会話と信心深い模範によって彼らを責める。洪水によって世界が滅ぼされる直前に行われたエノクの昇天は、火による破滅に先立つ地からの生けるすべての義人の昇天を表す。聖徒たちは神の正しい戒めへの忠実な服従のゆえに、彼らを憎んでいた者たちの面前で栄光を与えられる。(サイズ・オブ・ザ・タイムズ 1879年2月20日)

2月8日

目的のために 隠遁（いんとん）生活を求める

「〔エノク〕が移される前に、神に喜ばれた者と、あかしされていたからである。」（ヘブル 11:5）

エノクは、神が預言の霊によって彼にあらわされたすべてのことを人々に詳しく話した。ある者は彼の言葉を信じて、自分たちの悪をやめ、神を畏れて礼拝した。そのような人々は、しばしば隠れ家にいる彼を探し求めたので、エノクは彼らに教え、神がご自分の御心の知識を彼らに与えてくださるようと彼らのために祈った。ついに彼は隠遁のために一定の期間を選び、人々が彼を見つけるのを許さなかった。なぜなら彼らは神とのエノクの聖なる瞑想と交わりを妨げたからである。彼は自分を愛し、その知恵の言葉を聞く人々の社会を常に締め出したのでも、墮落した人々から自分自身を全く引き離したのでもなかった。定まった時に義人や悪人に会い、不信心者に彼らの悪いふるまいに背を向けさせるよう勞し、神を畏れるようにと教え、そのかたわら神の知識をもっている者にはもっと完全に神に仕えるようにと教えた。彼は自分の信心深い会話と聖なる模範によって彼らに益を与えることができるかぎり彼らのところにとどまった。そしてそれから、神との交わりに飢え渴き、神だけが彼に与えることのできる聖なる知識を求めて孤独な場所にとどまるために、一定の期間すべてのつきあい—義人、あざける者、偶像礼拝者—から身を引いた。

エノクは神との交わりの間ますます神聖に成長しつづけた。彼の顔は、彼の知恵の言葉を聞こうとする人々を教えている間も彼の表情に残っている聖なる光に輝いていた。彼の天来の威厳のある様子は人々に畏敬の念をあたえた。主は、エノクがご自分に忠実に従い、不法を嫌悪し、このお方のみ旨の知識を實踐することができるようにますます完全な知識を求めたので、彼を愛された。彼は、自分が畏れ、崇敬し、敬慕している神に自分をなおますます近く結びつけることを切望した。主はエノクが他の人々のように死ぬのをお許しにならず、彼を死を見ないで天に携え上げるようにと、天使をつかわされた。（サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1879年2月20日）

神に喜ばれる信仰

「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自分を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。」(ヘブル 11:6)

救いに必要なのはただ信仰を持つことであり、働きは何の意味もなく、不可欠なものは信仰だけであると主張する者が、クリスチャン世界に多くいる。しかし神の御言は、働きのない信仰は死んだものであるとわたしたちに告げる。多くの者が神の戒めに従うことを拒んでいながら、信仰は大いに論じる。しかし信仰には土台がなければならない。

神のみ約束はみな条件をもとになされている。もしわたしたちがこのお方のみ旨をなし、真理に歩むなら、そのとき、わたしたちは自分の願うことを求めることができ、それがわたしたちになされるのである。わたしたちが従順であるために真剣に努力している間は、神はわたしたちの嘆願をお聞きになる。しかし神は不従順であるわたしたちを祝福なさることはない。もしわたしたちがこのお方の戒めに不従順であることを選ぶなら、わたしたちは「信仰、信仰、信仰だけ」と叫ぶことはできるが、その応えは「行いを伴わない信仰のむなしさ」(ヤコブ 2:20) という神の確かなみ言葉が返ってくる。そのような信仰はただやかましい鐘や騒がしい鏡鉢と同じである。神の恵みの益を受けるために、わたしたちは自分の分を果たさなければならない、忠実に働き、悔い改めの実を結ばなければならない。

わたしたちは神と共なる働き人である。あなたは主人であるお方のための偉大な働きをするために、何か偉大な機会を待ちながら怠惰に座っているべきではない。あなたの通り道に直接おかれている義務をなおざりにすべきではない。そうではなく、あなたの周りに開いているささいな機会を活用すべきである。(信仰と働き 47)

あなたは、神のみ摂理があなたに割り当てておられる働きに、心から忠実に取りかかり、人生のより小さい働きにも最善を尽くしていかななければならない。ささいなことであっても、もっと大きな働きをなすときの徹底さを尽くしてささなければならない。あなたの忠実さは天の記録の中で是認される。あなたは自分の前の道が平らになるのを待つ必要はない。あなたに委ねられたタラントを活用するために働きに出なさい。世があなたをどのように思うかは関係ない。あなたの言葉、あなたの精神、あなたの行動が、イエスのための生きた証となるようにしなさい。そうすれば主は、ご自分の栄光のための証が、よく秩序立てられた生活と信心深い会話を備えて、深くなり、力を増し加えるよう、責任を負ってくださる。(サイン・オブ・ザ・タイムズ 1890年6月16日)

2月10日

働きによって示されたノアの信仰

「信仰によって、ノアはまだ見ていない事らについて御告げを受け、恐れかしくみつ、その家族を救うために箱舟を造り、その信仰によって世の罪をさばき、そして、信仰による義を受け継ぐ者となった。」(ヘブル 11:7)

ノアの時代の人々は鋭敏な知性を持っており、彼の預言が成就するのは不可能であると、科学的な根拠に基づいて示そうと努力した。ノアは自分の警告のゆえにあざけりを受け、狂信者とみなされた。ノアの神を信じる絶対的な信頼は、それが彼らを責める間たえず、彼らをいらだたせた。しかし彼らはこの忠実な警告者をその立場から動かすことはできなかった。主がこの警告をお与えになったのであり、ノアにとってはそれで十分であった。神のメッセージが彼の耳に鳴り響いているとき、哲学者の議論は彼にとって無であった。……

畏れに動かされて、ノアは家族を救うために箱舟を準備した。彼は一人びとりのクリスチャンを特徴づけるべき畏れを持っていた。ノアの完全な信仰は彼の畏れを増した。人と獣の上に、また地の上に降りかかる神の迫りくる怒りは、彼に箱舟を準備させた。彼の信仰そして神の怒りへの畏れは従順を生み出した。ノアは神に従うのを躊躇しなかった。彼は、箱舟を建造するのは大仕事であり、費用がかかるという言い訳をしなかった。彼は神を信じ、自分の所有するすべてを箱舟に注ぐその一方で、邪悪な世界はあざけり、惑わされた老人を見て楽しんだ。

彼らには自分たちの不信仰とあざけりの機会が多くあった。なぜなら神はご自分の目的をただちに実行なさらなかったからである。しかし時の経過がノアの信仰をゆるがせることはなかった。彼の神への信頼は衰えることなく、つぶやくことなく、必然的に含まれる辛苦と犠牲を受け入れた。行動と結びついたノアの信仰は世を責めた。なぜなら彼は悪人たちを譴責し警告し忠告する義の忠実な説教者だったからである。彼らの非難と悪口は時々ほとんど耐えがたかったが、父祖は自分の魂を神にとどめ、自分の大いなる必要のなかでこのお方に助けを求めた。嘲笑、侮辱、からかいの中を、彼は果たすべき大いなる使命を持つ人としてそこかしこへと出ていった。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1879年2月27日)

ノアが持っていたような力強さ

「そして、ノアの時にあったように、人の子の時にも同様なことが起るであろう。ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていたが、そこへ洪水が襲ってきて、彼らをことごとく滅ぼした。」(ルカ 17:26,27)

〔ノアは〕自分がその墮落した同世代の一般大衆のさげすみとあざけりの対象であることを知っていた。しかし自分を取り巻く不法が大きくなればなるほど、彼は、自分の服従においてますます熱心で、堅固で、辛抱強くなり、神に真実であろうとするひとりの人が世にいることを示した。彼は神への忠実で確固たる証人であり、すべての人に親切で礼儀正しく、侮辱に対して腹を立てなかった。いたるところで彼を迎えるののしり、不敬な言動を聞かない人のようであった。……

ノアは祈りの人であった。そして、神とのこの密接な交わりの中で、彼は自分の勇気と堅固さをことごとく見出した。彼は人々に説教し、警告し、懇願した。しかし彼らは自分たちの進路を変えようとしなかった。彼らは買い、売り、植え、建て、めとり、とつぎ、宴会と大食にふけり、ノアのメッセージに軽蔑を示しながら、自分たちの魂を低下させた。彼らの言葉と行動は、彼らの猶予期間が終わりに近づくにつれて、ますます卑しくなり墮落していった。(サイン・オブ・ザ・タイムズ 1879年2月27日)

自分本位、世の常習行為との一致の同じ精神が、ノアの時代のようにわたしたちの時代にも存在する。神の子であると公言する多くの者が、自分たちの公言を偽りとする熱心さをもって世的なことを追及する。彼らは自分たちの猶予期間の最後の瞬間まで植え、建て、買い、売り、食べ、飲み、めとり、とついでいるであろう。これがわたしたち自身の民の大部分の状態である。(教会への証 5巻10)

感謝なことにすべての者が肉の安全というゆりかごの中で眠るようにと揺り動かされているわけではない。時のしるしを識別する忠実な者がいる。現代の真理を公言している大部分の者が自分たちの働きで自分たちの信仰を否定する一方で、最後まで耐える者がいる。(教会への証 5巻10)

2月12日

アブラハムは天の国を求めた

「信仰によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った。信仰によって、他国にいるようにして約束の地に宿り、同じ約束を継ぐイサク、ヤコブと共に、幕屋に住んだ。」（ヘブル 11:8,9）

神がアブラハムをお用いになる前に、彼は過去の交際から離れなければならなかったが、それは彼が人間の感化力に支配されず、人間の助けに頼らないでいられるためであった。神と結びついている今、この人はこれからは見知らぬ人々の間で暮らさなければならない。彼の品性は特別で世のすべての人とは異なっていないなければならない。彼は自分の行動の方向を友人たちが理解できるように説明することすらできなかった。なぜなら彼らは偶像礼拝者だったからである。霊的な事柄は霊的に説明されなければならない。それゆえ彼の動機と行動は、彼の親族と友人たちの理解を超えていた。……

まさにアブラハムのような信仰と確信を、今日神の使者たちは必要としている。しかし主がお用いになることのできる多くの者は、他のすべてに勝るひとつのみ声に聞き従いつつ前進しようとしな。親族や友人とのつながりは、あまりにしばしば神の僕に非常に大きな感化力を持っているので、神は彼らにほとんど教えを与えることができず、ご自分の目的の知識を彼らに知らせることがほとんどおできにならない。そしてしばしば、しばらく後にこのお方は彼らを脇へやり、その場所に他の者を召し、彼らを同じ方法で試し、テストされる。主は、ご自分の僕らが完全にご自分に献身し、親族や他のすべての地上の交際のきずなにまさって主の奉仕を尊重するなら、彼らのためにもっと多くのことをなさるのである。（教会への証 4 巻 523,524）

〔アブラハムが〕サラを葬ったとき、彼は死者を埋葬する一片の土地すら所有していなかった。彼はそれを買わなければならなかった。しかし主が、彼の前に不死の生涯、また彼の家庭となるべき、清められたこの地上の光景を開かれたとき、彼は満足した。わたしたちの一人びとりの場合もそうである。わたしたちはこの世では巡礼者、他国人である。わたしたちは、アブラハムが望み、神がその建設者、造り主であられるその都を求めている。（原稿別ス10 巻 120,121）

働いたアブラハムの信仰

「信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。」(ヘブル 11:17)

神がアブラハムの信仰を是認なさった証拠として、このお方は彼に「信仰の父」という名をお与えになった。アブラハムの模範は彼の信仰を持っている子らの益のために、聖なる歴史の中に記録されている。この信仰の大いなる行為は、神を信じて疑わない確信、このお方のご要求への完全な服従、神のご意志への全くの明け渡しの教訓を教える。わたしたちは、自分たちの所有するものは何も神へお捧げするのに高価すぎるものはないことを、アブラハムの模範の中で教えられる。……

人間の判断力では、アブラハムに与えられたご命令は過酷で、人間の力で耐えるにはあまりに大きすぎると考えるかもしれない。アブラハムの強さは、神からのものであった。彼は死すべき人間の視力で見える事柄ではなく、永遠の事柄を見た。神は、ご自分が神聖な同情と無限の愛のうちに人にお与えになった以上のものを、アブラハムに要求されたのではなかった。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1879年4月3日)

神を信じると公言し、クリスチャンとして通用している者のうち、神が自己を否定し、彼らの最愛の宝をこのお方に譲るようにと命じられるとき、今どれほど多くの人がこのお方のみ声に従わないことであろうか。彼らは躊躇し、地上のものにしがみつく。彼らの愛情は世と世の事柄の上にあり、まさにこのような人々のうちのある者は、自分たちが真理に従うためにどれほど多くのものを犠牲にしてきたかを最も多く語るのである……

真理を公言し、世を愛する半分も神を愛さない者が多くいる。神は彼らをテストし、試しておられる。世と富への彼らの愛は彼らの思いを暗くし、彼らの判断を歪め、彼らの心をかたくなにする。神は、少なくとも彼らのうちの何人かにご自分の意志をあらわし、彼らのイサクをご自分に捧げるようにと命じられた。しかし彼らは従うことを拒み、黄金の機会は過ぎ去ってしまった。尊い時間は永遠に向けて、果たされなかった義務や明白な怠慢の記録の証言をする。わたしたちのもっているものは、神に明け渡されない限り、真の価値はない。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1875年4月1日)

2月14日

モーセの信仰

「信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。」(ヘブル 11:24～26)

モーセには適切な信仰があったので、神に完全に信頼していた。彼は助けを必要としていた。そして、そのために祈り、信仰によってそれをつかみ、神が自分をかえりみて下さるという確信を自分の経験に織り込んだ。彼は、神が自分の人生を特に支配しておられると信じた。彼は自分の人生の細部にわたって神を見、このお方を認め、自分はすべてをご覧になるお方、動機を量るお方、心を試されるお方の目の前にいると感じた。彼は神を仰ぎ、どのような形の誘惑にも堕落しないように自分を支えてくれる力を求めて神に信頼した。彼は特別な働きが自分に割り当てられていることを知っており、その働きをできる限り完全に成功させることを望んだ。しかしこれは神の助けがなければできないことを彼は知っていた。なぜなら、彼が扱う民は強情な民であったからである。神のご臨在は、人が置かれ得る最も苦しい状況を通じて彼を支えるのに十分であった。

モーセは単に神のことを考えたのではなく、このお方を見た。神は彼の前にたえず見えており、彼は決してそのみ顔を見失うことはなかった。彼はイエスを自分の救い主として見、救い主の功績が自分に着せられることを信じた。この信仰はモーセにとって当て推量ではなく、現実であった。これはわたしたちが必要としている信仰の種類であり、テストに耐える信仰である。ああ、わたしたちは目をイエスに留め続けていないために、どれほどしばしば誘惑に屈することであろうか。わたしたちの信仰が継続しないのは、自己放縦を通して、罪を犯すからであり、そのときわたしたちは「見えないかたを見ているように」することに耐え得ないからである(ヘブル 11:27)。

兄弟よ、キリストを日々、毎時間あなたの連れ合いとしなさい。そうすればあなたは自分に信仰がないとつぶやくことはない。キリストをじっと見つめなさい。このお方の品性を注意深く見なさい。このお方のことを話しなさい。あなたが自己を高めるのを少なくすればするほど、イエスのうちに高めるべきものをますます見るようになる。神はあなたが行なうための働きを持っておられる。主を絶えずあなたの前に置きなさい。(教会への証 5 卷 651,652)

つり合わないくびきを共にしない

「あなたは他の神を拜んではならない。主はその名を『ねたみ』と言って、ねたむ神だからである。おそらくあなたはその国に住む者と契約を結び、彼らの神々を慕って姦淫を行い、その神々に犠牲をささげ、招かれて彼らの犠牲を食べ、またその娘たちを、あなたのむすこたちにめとり、その娘たちが自分たちの神々を慕って姦淫を行い、また、あなたのむすこたちをして、彼らの神々を慕わせ、姦淫を行わせるに至るであろう。」(出エジプト 34:14-16)

あなたが、影の晴れることの決してない家庭を持ちたいと思わない限り、自ら神の敵であるものと結びついてはならない。……

主は古代イスラエルに、彼らの周りにいる偶像礼拝者と婚姻関係にならないようにとお命じになった。「また彼らと婚姻をしてはならない。あなたの娘を彼のむすこに与えてはならない。かれの娘をあなたのむすこにめとってはならない。……それは彼らがあなたのむすこを惑わしてわたしに従わせず、ほかの神々に仕えさせ、そのため主はあなたがたにむかって怒りを発し、すみやかにあなたがたを滅ぼされることとなるからである。」(申命記 7:3,4) ……

あなたはこれらのはっきりとした疑いようなない指示をあえて無視するのであるうか。神の子として、キリストの王国の臣民として、このお方の血で買われた者として、あなたはこのお方の主張を認めず、その御霊によって支配されない者と自分をいかに結びつけることができようか。……あなたは滑らかで快い言葉を聞き、すべてが好都合であると信じるように導かれるが、あなたはこれらの都合の良い話をする動機を読むこと、その心の中に隠された悪意の深さを知ることはできない。サタンがあなたの魂のために用意している光景の背後を見、そのわなをはっきりと見ることはできない。彼は、あなたに向かって誘惑の矢を向けるためにたやすく近づくことのできる進路をあなたが取るよう導きたいと思っている。神がご自分の僕の思いに働きかけておられる一方で、サタンは不従順の子らを通して働く。キリストとベリアルの間には一致はない。両者は調和することはできない。不信心者とつながることはあなた自身をサタンの陣地に置くことになる。あなたは神の御霊を深く悲しませ、このお方の守りを失う。あなたは永遠の命のための戦いを戦っているときに、自分に敵対するこのように恐ろしいよけいなものを持つ余裕はあるであろうか。(教会への証 5 巻 363 ~ 365)

2月16日

普通のわな

「あなたがたは心が迷い、離れ去って、他の神々に仕え、それを拝むことのないよう、慎まなければならない。」(申命記 11:16)

過去数年間、神の民の危険は世への愛であった。ここから利己心と貪欲の罪が芽生えた。彼らはこの世のものを得れば得るほどそれに愛情を注ぎ、なおももっと求めて手を伸ばす。天使は言った。「富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」(ルカ 18:25)。しかしわたしたちが世に警告の最後の通告をしていることを信じると公言する多くの者が、富んでいる者が王国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方がもっとやさしい立場に自分を置こうと、全エネルギーを用いて努力している。……

サタンは、真理を公言する者に固有の利己的な貪欲な気質を眺め、彼らの道に繁栄を投げかけ、彼らに地の富を提供することによって彼らを誘惑する。もし彼らが生来の気質に打ち勝たないなら、彼らは富を愛し、自分の偶像を拝むことによってつまずき、墮落することをサタンは知っている。サタンの目的はしばしば達成されている。世への強い愛が真理への愛に勝つかそれを飲み込む。世の王国が彼らに差し出され、彼らは熱心に自分の宝をつかみ、自分は素晴らしく栄えていると考える。サタンは自分の計画が成功したので勝ち誇る。彼らは世への愛のために神への愛をあきらめる。

わたしは、このように栄えている者が神の祭壇に自分の財産をすべて置くことによって利己的な貪欲に打ち勝つなら、彼らはサタンの計画を挫折させることができるのを見た。そして真理のみ事業を進展させ、やめ、みなしご、苦しむ者を助けるために、どこで財産が必要とされているかが彼らにわかるとき、喜んで差し出し、このようにして天に宝を積む。

真の証人の勧告に聴き従いなさい。富む者となるために、火で精錬された金を買いなさい。身につけるために、白い衣を買いなさい。見えるようになるため、目薬を買いなさい。何らかの努力をしなさい。(教会への証 1巻 141,142)

過去から学ぶ

「わが民よ、聞け、わたしはあなたに勧告する。イスラエルよ、あなたがわたしに聞き従うことを望む。あなたのうちに他の神があつてはならない。あなたは外国の神を拝んではならない。」(詩篇 81:8,9)

わたしたちは最も厳粛な時代に生きている。わたしに与えられた最後の幻の中で、今真理を公言する人々のうち一部の人以上、それによって清められず、救われないという驚くべき事実を、わたしは示された。多くの者が働きの単純さを越え、世に順応し、偶像を大事にし、靈的に死んでいる。イエスに従う、へりくだった、自己犠牲をしている者は、無関心な者、世を愛する者を後ろに残して、完全へと進んでゆく。

わたしは古代イスラエルを指し示された。エジプトを離れた大軍の成人は二人しかカナンへの地に入らなかった。彼らの死体は彼らが罪を犯したがゆえに荒野に撒き散らされた。現代のイスラエルは神を忘れ、その古代の民以上に偶像礼拝に導かれる危険がもっと大きい。安息日遵守者であると公言する者によってすら、多くの偶像が礼拝されている。神は古代の民に偶像崇拜を警戒するようにと特に指令なされた。なぜならもし彼らが生ける神に仕えることからそらされるなら、このお方ののろいが彼らに注がれるからであり、その一方で、もし彼らが心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くしてこのお方を愛するなら、かごいっぱい、蔵いっぱいになるまで彼らを豊かに祝福し、彼らのただ中から病を取り除かれるからである。

今神の民の前に祝福とのろい—もし彼らが世から出て分離し、へりくだった従順の道を歩むなら、祝福が、もし彼らが天の気高い要求を踏みにじる偶像礼拝者となつてつながるなら、のろい—がある。反抗的なイスラエルの罪と不法は、もしわたしたちが彼らの違反の模範をまね、神から離れるなら、彼ら同様わたしたちも必ず墮落するという警告として記録されており、その状況はわたしたちの前に提示されている。「これらの事が彼らに起つたのは、他に対する警告としてであつて、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである」(コリント第一 10:11)。

2月18日

世を動かす力

「ただ大きな力と伸べた腕とをもって、あなたがたをエジプトの地から導き上った主をのみ敬い、これを拝み、これに犠牲をささげなければならない。またあなたがたのために書きしるされた定めと、おきてと、律法と、戒めとを、慎んで常に守らなければならない。他の神々を敬ってはならない。」(列王記下 17:36,37)

わたしたちは〔神の〕被造物、そのみ手のわざであるので、このお方は崇敬、光栄、愛をお受けになる権利がある。わたしたちはこのお方への従順によってのみ自分の愛を証明することができる。もしこのお方がわたしたちの畏れであるなら、わたしたちはこのお方に栄と光栄を帰すよう努め、そのみ旨を行うことに最高の幸福を見出す。このお方への快い従順を捧げるのに失敗することは何であっても、このお方へのわたしたちの愛は偽りであることを示す。……

クリスチャンであると公言する者が余りにしばしば自分たちの造り主への義務を忘れる。彼らは十字架を心配してこのお方の戒めへの従順をあらわすことにより主をあがめるのを怠る。そしてキリストに従っていると公言する非常に多くの者が自分たちの生活の中でそのご品性を表さないで、宗教は誤解され、不信心者に軽蔑される。クリスチャンが絶えず神の律法に違反するので、キリスト教はその力を失う。なぜなら、利己心が見られ、偶像礼拝と食欲があらわされるからである。

キリストに真に従う者は神の戒めをこのお方が守られたように守る。もし彼らが真心からこのお方を自分の個人的な救い主として受け入れるなら、彼らは神に対する自分たちの義務を果たし、品性にこのお方をあらわしたいとの熱心な願いにより動かされるようになる。そしてもし律法に完全に従っていたなら、地はその住民のもとに今のように墮落してはいなかったのである。圧迫と不正は存在せず、愛、調和、喜びが見られたことであろうに。キリスト教の力が教会の中に現れ、世にはキリストに従う者を矛盾で責める原因はなかったであろうに。聖霊の改心させる力が感じられ、幾千もの人々が救われるべき者としてそのような教会に加えられていたことであろうに。(サイズ・オブ・ザ・タイムズ 1897年3月4日)

一瞬たりとも失ってはならない

「わたしの名をもってとなえられるわたしの民が、もしへりくだり、祈って、わたしの顔を求め、その悪い道を離れるならば、わたしは天から聞いて、その罪をゆるし、その地をいやす。」(歴代志下 7:14)

われわれは世界歴史の最も厳粛な時代に生存している。地上のおびただしい数の人々の運命が、決定されようとしている。われわれ自身の将来の幸福も、他の魂の救いも、今われわれが歩いている道にかかっている。われわれは真理のみ霊によって導かれる必要がある。キリストに従う者はみな、「主よ、わたしは何をしたらよいでしょうか」と熱心にたずねるべきである。われわれは祈りと断食をもって主の前にへりくだり、主のみ言葉について、特にさばきの光景について瞑想する必要がある。われわれは今、神のことについて、深い、生きた経験を求めなければならない。一刻もむだにはできない。われわれの周囲には重大な事件が起こっており、われわれはサタンの魔法の働いている場にいるのである。神の見張り人たちよ、眠ってはいけない。敵は近くに忍び込んでいて、あなたが気をゆるめて眠気を催すならば、いつでも飛びかかってえじぎにしようと待ち構えている。

多くの者は、神の前における自分の真の姿について欺かれている。彼らは自分たちは悪事を行っていないと喜んでいるが、神が彼らに要求され、しかも彼らが実行することを怠った、善にして高潔な行為のことを数えるのを忘れている。彼らは神の園の木であるだけでは十分ではない。彼らは実を結ぶことによって神のご期待に答えなければならない。自分を力づけてくれる神の恵みを通してなすことができたはずの善行をしなかった責任を、神は問われる。彼らは地をふさぐものとして天の書に記録される。しかし、この種の人の場合も、全く絶望的というわけではない。神の恵みを軽視し、神の恵みを悪用したこれらの人々に、忍耐深い愛の神のみ心は、「『眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照すであろう。』そこで、あなたがたの歩きかたによく注意して、……今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである」と訴えておられる(エペソ 5:14～16)。(各時代の犬争闘下巻 368,369)

2月20日

聖潔の美

「神の子らよ、主に帰せよ、栄光と力を主に帰せよ。み名の栄光を主に帰せよ、聖なる装いをもって主を拝め。」(詩篇 29:1,2)

神の栄光のために非常に熱心であること、また、あたかも神のご要求がわたしたちの自由に対する制限でもあるかのように、悲しい表情や無分別な言葉によってさえも、悪い評判をもたらしたりしないことは、わたしたちの義務である。この悲しみ、失望、罪の世においてさえ、主はわたしたちが快活でご自分の力強さにあつて力強いことを望んでおられる。わたしたちは、容貌において、気質において、言葉において、品性において、神の奉仕はよいものであると証すべきである。わたしたちはこのようにして「主のおきては完全であつて、魂を生きかえらせ」と宣布する(詩篇 19:7)。

わたしたちの宗教の明るく快活な側面が、日々神に献身しているすべての者によってあらわされる。わたしたちは悲しく思われる試練を嘆かわしく語ることによって、神を辱めてはならない。教育者として受け入れられるすべての試練は、喜びを生み出す。宗教生活全体が高められ、上げられ、気高くされ、よい言葉と働きを伴った香りとなる。敵は魂が落胆し、がっかりし、悲嘆にくれ、うめいていると非常に喜ぶ。彼は、わたしたちの信仰の結果がちょうどそのような印象になることを望んでいる。しかし神は、思いが低い水準を手に入れるのを望んでおられない。このお方はそれぞれの魂が、贖い主の支えの力のうちに勝利することを望んでおられる。(教会への証 6巻 365,366)

信仰と働きは手に手をとって進む。それらは打ち勝つ働きで調和のとれた行動をする。信仰のない働きは死んだものであり、働きのない信仰も死んだものである。働きは決してわたしたちを救わない。それはわたしたちのために役立つキリストの功績である。キリストを信じる信仰によって、このお方はわたしたちの不完全な努力をすべて神に受け入れられるものとしてくださる。わたしたちが持つようにと要求されている信仰は、何も行わない信仰ではない。救う信仰は愛によって働き、魂を清めるものである。怒りや疑いなしに神に聖なる手を上げる者は神の戒めの道を聡明に歩む。(信仰と働き 48,49)

栄光を主に

「もろもろの民のやからよ、主に帰せよ、栄光と力を主に帰せよ。」(歴代志上 16:28)

臆病によって、あるいは神の戒めを守る民であることが知られるのを恐れることによって、得るものは何もない。わたしたちの光を、あたかも自分たちの信仰を恥じているかのように隠すことは、ただ悲惨な結果に終わるだけである。神はわたしたち自身の弱さにまかせてそのままになさる。主がわたしたちを召されるいかなる場所においても、わたしたちが自分たちの光を輝かせるのを拒むことを、主がお許しにならないように。もしわたしたちが自分自身の考えと計画に従い、イエスを後にして、あえて自分自身で出て行こうとするなら、不屈の精神や勇気あるいは霊的な力を得ることを期待できない。神は道徳的英雄—このお方の特別な民であることを恥としない人々—を持っておられたし、また今も持っておられる。彼らの意志と計画はみな神の律法の下に従属している。イエスの愛は、彼らが自分たちの命を自分になくしてはならないものと見なさないように導いてきた。彼らの働きは、神のみ言葉から光を捉え、それをはっきりとした不変の光線として世に輝かせることであった。「神への忠誠」が彼らのモットーである。(教会への証 5巻 527,528)

自分の愛情が神にとどまっている人々は成功する。彼らはキリストのうちに自己を見失い、世間的な魅力は、彼らをその忠誠から引き離そうとそそのかす力を失う。彼らは外面的な見せびらかしが力を与えないことを悟る。神の選ばれた民として、わたしたちがなすべき働きを正しくあらわすのは、誇示でも、外面的な展示でもない。……

神の奉仕にかかわっているすべての人は、見せたいとねがう願望によって、他の人を放縦や自己の栄光へ導くことがないように防御しなさい。……この時代のための真理を信じると公言する人々が主の道に歩み、正義と公道を行っているかぎりには、主が彼らに繁栄を与えてくださることを期待することができる。しかし、彼らが狭い道からそれることを選ぶなら、彼らは自分自身と導きを求めて彼らを見ている人々に破滅をもたらすのである。(教会への証 7巻 90,91)

あなたは栄光をほんのわずかといえども取ってはならない。そうではなく、あなたは神に栄光を帰し、そのみ働きに携わるすべての人が、成功の秘訣はキリスト・イエスにあることを理解するのを助けるよう努めるべきである。(サイン・オブ・ザ・タイムズ 1887年5月19日)

2月22日

神のみ旨に明け渡す

「さあ、われらは拝み、ひれ伏し、われらの造り主、主のみ前にひざまずこう。主はわれらの神であり、われらはその牧の民、そのみ手の羊である。どうか、あなたがたは、きょう、そのみ声を聞くように。あなたがたは、……心をかたくなにしてはならない。」(詩篇 95:6～8)

わたしたちは真理の知識を持つだけでは十分ではない。愛のうちに歩み、働き、神のみ旨にわたしたちの意志を一致させなければならない。……

わたしたちが自分たちのうちに神のみ旨をなしていただくならば、罪を心にいだくことはない。清めの炉の中で、すべてのかすは燃やし尽くされる。

聖霊がペンテコステの日に下ったとき、それは力強い突風のようにであった。それは少しも制限されなかった。なぜなら、弟子たちが座していた場所に満ちたからである。わたしたちの心がそれを受ける準備ができたならば、今もそのように与えられるのである。

すべての教会員は神のみ前にひざまずき、御霊を与えてくださるように熱烈に祈ろう。「主よ、わたしの信仰を増してください。わたしにあなたのみ言葉を理解させてください。なぜなら、主のみ言葉は光を与えるからです。あなたのご臨在によってわたしを新たにしてください。わたしの心をあなたの御霊で満たし、キリストがわたしを愛されたように、わたしが兄弟たちを愛することができるようにしてください」との声を上げなさい。

神は自らを奉仕のために備える人々を祝福してくださる。彼らは御霊の保証を持つということがどういうことかを悟るようになる。なぜなら、彼らはキリストを信仰によって受け入れたからである。キリストの宗教は罪の許し以上のことを意味する。それは罪が取り除かれて、その空いたところが御霊で満たされることを意味する。それは思いが神の光によって照らされ、心から自己がなくなり、キリストのご臨在で満たされることを意味する。この働きが教会員のためになされるとき、教会は生きた働く教会となる。

わたしたちは一つの思い、一つの目標になるよう、最も熱心に努めるべきである。聖霊のバプテスマ、ただこれだけがわたしたちをその地点にまで到達させることができる。わたしたちは大きな働きがわたしたちのためになされるように、自己放棄によって聖霊を受けるために自分たちの心を整えようではないか。そのとき、わたしたちは、「わたしのしていることをご覧なさい」とは言わずに、「神のいつくしみ深さと愛をご覧なさい!」と言うことができる。(ビュー・アンド・ハルト 1902年6月10日)

心の聖地

「われらの神、主をあがめ、その聖なる山で拝みまつれ。われらの神、主は聖でいらせられるからである。」(詩篇 99:9)

わたしたちはイエスのみ足の跡に歩みたいであろうか。ナザレやベタニヤ、またエルサレムの道を探す必要はない。わたしたちは病床や苦しむ人類のかたわらに、貧困に打ちのめされ悩まされている者のあばら屋にイエスの足跡を見出すのである。わたしたちはこれらの足跡に歩み、苦しんでいるものを慰め、落胆した人に希望と慰めの言葉を語るができる。イエスが地上におられたときになさったようにすることにより、わたしたちはこのお方の祝福されたみ足の跡に歩むのである。イエスは「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と言われた(ルカ 9:23)。罪ののろいを受けた地がすべての罪のしみから清められるとき、オリブ山が二つに裂けて、広大な平野となるとき、神の都がその上へ下ってくるとき—今聖地と呼ばれている地がほんとうに聖なるものとなる。しかし、神のみ事業と働きは、エルサレムに巡礼することによって前進することはない。(レビュー・アンド・ヘルド 1896年6月9日)

神の要求を一つでも故意に犯していながら、清くなれると信じて、自分を欺いてはならない。罪と知りながらそれを犯すことは、聖霊のあかしの声を沈黙させ、魂を神から引き離すものである。「罪は不法である。」そして、「すべて罪を犯す者〔律法を犯す者〕は、彼を見たこともなく、知ったこともない者である」(ヨハネ第一 3:6)。ヨハネは彼の手紙の中で、愛についてくわしく述べたのであるが、しかしまた、神の律法を犯す生活をしながら清められたと主張している人々の正体を、摘発することを躊躇しなかった。『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない。しかし、彼の御言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである(ヨハネ第一 2:4, 5)。ここに、すべての人の信仰の告白を試みる試金石がある。天においても地においても、清めに関する神の唯一の標準によって量るのでなければ、だれひとり、清い人であるとはいえない。(各時代の斗争闘下巻 201)

2月24日

心の低さを培う

「主は高くいらせられるが低い者をかえりみられる。しかし高ぶる者を遠くから知られる。」(詩篇 138:6)

誇りや自己尊重を片鱗(へんりん)たりとも心にいだいてはならない。なぜなら、それはイエスを心から締め出し、その空いたところをサタンの特質で満たすからである。(レビュー・アンド・ヘラルド 1891年8月4日)

自らを知るということは、へりくだるということである。自己を知ることにより、自分自身のすばらしい資質を朗々と述べることによって、いと高き者を喜ばせようとする気質はまったくなくなる。自分たちの罪と不完全さを悟って、わたしたちが熱心な懇願をもってイエスの足元に来るならば、わたしたちの嘆願が聞かれずにやりすごされることはない。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1885年2月19日)

われわれが出会わねばならない困難は、キリストのうちにかくれている柔和によってずっと軽くなる。もしわれわれが、主の謙遜を身につけるなら、われわれは毎日受ける軽蔑や拒絶や迷惑などを超越し、そうしたものが心に暗い影をなげることがなくなる。……

キリストのへりくだった柔和な精神をあらわす者たちは、神からやさしく見守られている。彼らは、世の人々からさげすみの目をもって見られるかも知れないが、神の御目には非常にとうといのである。賢明な人、偉大な人、慈善に富んだ人たちだけが、天の宮への旅券を獲得するのではない。それはまた、熱心で、休まず活動している忙しい働き人だけでもない。そうだ、心の貧しい者—キリストの内住を熱望し、謙遜な心もち、神のみこころを行うことを最高の望みとしている人こそ、十分に天国にはいるのである。(各時代の希望中巻 6,7)

自分たちの衣を洗い、小羊の血で白くするすべての人は、厳しい試練にあうことになる。試練の中にあつて、わたしたちは堅く立ち、わたしたちを贖うためにご自分の尊い命をお与えになったお方に誉れを帰すよう求めるべきである。わたしたちの働きにおいて、強い反対の底流に出会わなければならないであろう。本物の改心、新しくされた心は、わたしたちを試練の下にあつてもやさしくあるように守り、生活において神の恵みをあらわすことを教える。最終的な清算の日にキリストのみ口より神の都への歓迎の言葉を受ける人々は、厳しい状況下にあつても改心したままでいた人々である。(オーストラリア連合総会記録 1907年4月29日)

リバイバルの鍵

「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖となえられる者がこう言われる、『わたしは高く、聖なる所に住み、また心砕けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、砕ける者の心をいかさ。』」（イザヤ 57:15）

主はご自分の民の間にリバイバル、すなわちご自分が彼らに課された特別な義務を認めるように、求めておられる。神の畏れをいただいているすべての魂が、神の栄光だけに目を向けて、ご自分の前に歩み、働くようにと求めておられる。なされるべき大いなる働きがある。そしてだれ一人として日々神のみ前に自分たちの心をへりくだらせ、このお方が送られるすべての光のうちは歩まないかぎり、その働きを適切に代表することのできる者はいない。

神の民が、一致と無我のうちに、心のへりくだりをもって働くならば、成し遂げられる偉大な働きがある。すべての自己称揚をみつけ、取り去らなければならない。真理と義だけがこの時代のためのテストに耐える。わたしたちは日ごとにわたしたちと共に神の御霊にいていただく必要がある。それはすべての悪い思いと賢明でない行動から守られるためである。自分たちの目がこの危険な時代にあってわたしたち個々人の霊的な必要に対して盲目になることを恐れるべきである。多くの自称クリスチャンたちが利己的な利益を築き上げるのに夢中になってしまっている。わたしたちは今、霊的な眠りから目覚めるべきである。……

教会員がクリスチャンになること、すなわちキリストに似た者になること、へりくだり、純粹で、正直になることを、全的に決心するとき、主はご自身の聖霊によって、ご自分を表してください。今こそなされる必要のある働きをなすべき時である。男女を神から、また彼らの助けと優しい同情を必要としている人々から引き離すように導くのは、自尊心である。……

魂のへりくだりを大事にしよう。そして神に完全に明け渡そう。わたしたちの教会は利己心と誇りを捨て、魂をむなしいことへと持ち上げるのをやめよう。終わりは近い。そしてわたしたちは警告と憐れみのメッセージを世に与えなければならない。そしてわたしたちの唇をもってこのメッセージを宣布するだけでなく、わたしたちの単純で柔和な正しいことを行う生活によって、神のみ言葉の真理を信じていることをあらわすべきである。（ビュー・アソッド・ワールド 1909年8月5日）

2月26日

一人だけが義とされて家に帰った

「ふたりの人が祈るために宮に上った。そのひとりにはパリサイ人であり、もうひとりには取税人であった。パリサイ人は立って、ひとりでこう祈った、『神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。わたしは一週に二度断食しており、全収入の十分の一をささげています』。ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天にむけようとししないで、胸を打ちながら言った、『神様、罪人のわたしをおゆるしてください』と。あなたがたに言っておく。神に義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう。』(ルカ 18:10～14)

パリサイ人と取税人の物語の中で、キリストはわたしたちが学ばなければならない最も重要な教訓の一つ、すなわちうぬぼれの危険をお教えになった。ここで、二種類の礼拝者が提起されている。パリサイ人によって表されている種類は、敬神が際立っており、品性の非常に優れたものを持った人と見なされている。もう一つの取税人によって表されている種類の人は世の目から見るとはるかに劣っている。しかし、これは正しい評価であったであろうか。否。真実は正反対一天においてなされている彼らの評価はまったく反対であった。パリサイ人も取税人も心を探られ、人をかたより見ない神の御目の下にあった。富や肩書き、才能や評判が、神の恩寵を得るために推奨することはない。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1885年2月19日)

ああ、わたしたちが自己に信頼しない同じ精神と、自分にまったく価値がないという同じ自覚を持つことができるように。わたしたちは、義とされて自分の家に帰っていくことができるように、キリストの恵みに自分の魂のうちに生きていただかないのであろうか。……

ほんとうの休息と落ちついた心の平安がこれほどわずかしかない理由は、自己に対する最高の愛があるからである。わたしたちのなすすべてのことに自己が混じっている。わたしたちは自己をもっと少なく、イエスをもっと多く持たなければならぬ。(ビュー・アソド・ハムド 1888年8月28日)

教会のすべての個々人は、自己を吟味し、自分が真理のうちにいるかどうかを調べるべきである。この厳密な心を探る働きが、重要不可欠である。信仰の祈りが絶えず、神へと上らなければならない。(同上 1888年6月26日)

さばきの時に不平を言ってはならない!

「兄弟たちよ。互に不平を言い合ってはならない。さばきを受けるかも知れないから。見よ、さばき主が、すでに戸口に立っておられる。」(ヤコブ 5:9)

キリストは、ご自分に従うと公言する人々、すなわちご自分の弟子たちが、クリスチャンの愛を培うことを怠るとき、彼らが信仰のうちにある自分の兄弟たちの心に痛みを生じさせるようなやり方で行動するとき、深く悲しまれる。彼らは自分たちの宗教経験を損ない、自分自身と他の人々の道につまずきの石を置くのである。彼らは自分たちが信じると公言する真理を辱める。自分の兄弟たちを扱う際の感情的な言葉や威圧的な行動によって、彼らは自分たちがあらゆる義の敵の精神によって支配されていることを表す。彼らは神聖な火の代わりに異火を用いる。

人が新たに生まれ、キリスト・イエスにあつて新しい人であることを示すことのできる最も力強い証拠は、自分の兄弟への愛を表すこと、キリストのような行為をすることである。これこそ、担うことのできる最もすばらしい証拠である。(世界総会冊子 1900年 7月1日)

もしわたしたちがキリストのさばきの座の前に立ち、自分たちについて言われることを聞くことができるとすれば、自分の品性について、自分自身が下す評価とは、何と違った内容を聞くことであろう。わたしたちは岩の上に落ちて、砕かれなければならない。こうして自己が全くなり、イエスがすべてになるためである。

わたしたちの家庭の中で救いの感化力が働かされるように、良い家庭宗教が必要とされている。わたしたちは自分自身の家庭という囲いの中で、優しく、同情深く、親切になり、炉辺にいるいとしい人たちに好意を示すことによって、伝道者となることを学ぼう。多くの家庭の中で、愛の精神が大いに必要とされている。語られる言葉が、柔らかい植物の上を下って回復させ、生気を与える露や雨のようであるべきときに、しばしば撃ちつける情け容赦のない雹(ひょう)のようである。あなた自身のぶどう畑の中で働き、愛の精神を培いなさい。あなたの心と家庭の中で教えを受けやすい、キリストのような精神が見られるまでは、あまりにも外の働きに熱心なってはならない。……

もしイエスがすべての家庭に宿っておられるなら、教会は主のご臨在の回復させる力を感じることであろうに。(1888年 4月28日)

2月28日

砕けた悔いた心

「神の受けられるいけにえは砕けた魂です。神よ、あなたは砕けた悔いた心をかろしめられません。」(詩篇 51:17)

あなたは自己に死に、肉を十字架につけなければならない。あなたは自分自身を十字架につけるにあたり、方法や手段を考案する必要はない。自分を苦しめる苦行には何の功績もなく、テストが訪れたときには、価値がないことが明らかになるであろう。わたしたちは心を神に明け渡さなければならない。それはこのお方がわたしたちを新たにし、聖化し、わたしたちをご自分の天の宮にふさわしいものとするのがおできになるためである。わたしたちは特別な時を待つてはならない。そうではなく、今日、罪の僕となることを拒んで、自らを神にお捧げしなさい。あなたは自分自身の力でほんの一時でも罪を振り払うことができると思うであろうか。それはできない。

イエスは罪深い肉の様をご自分に負われたとき、罪人として取り扱われた。それは罪人が義なる者として取り扱われることができるためであった。御父はキリストを信じるわたしたちを、ご自分のひとり子を愛されるように、愛してくださる。こうして信仰によって、わたしたちはキリストの義をつかむことができ、救い主はわたしたちをあらゆる罪から救われるのである。改心した魂はキリストが憎まれるものを憎み、キリストが愛されるものを愛する。このお方はご自分の死と苦しみによって、あなたが罪から清められるための備えをなされたのではなかったか。あなたはイエスの血をとって、それを信仰によって自分の心に塗らなければならない。なぜなら、それだけがあなたを雪よりも白くすることができるからである。しかし、あなたは言う。「わたしのすべての偶像を明け渡すことは、わたしの心を砕きます」。これこそ必要とされていることである。すべてを神に明け渡すことによって、あなたは岩の上に落ちて砕かれなければならない。遅らせることなく、このお方のためにすべてを明け渡しなさい。なぜなら、砕かれないかぎり、あなたに価値はないからである。

なぜ、これ以上長く待つのか。なぜ、神をみ言葉どおりに信じて、「わたしは自分自身をあなたにお捧げします。これがわたしにできるすべてです」と言わないのか。……

イエスはあなたにあるすべてを欲しておられる。このお方はあなたの魂のために無限の代価を支払われた。あなたが持っているもの、あなたの存在そのものはこのお方に属する。神があなたを助け、見て生きることができるようになる。キリストはもうまもなくおいでになる。このお方は苦しみのうちにわたしたちの兄弟となられた。そして、わたしたちがまもなくこのお方のまことの御姿を見るという希望は、なんとという喜びをもたらすことであろう!わたしたちはここでもう少しの間苦しむであろうが、それから永遠の幸福に入るのである。(サィズ・オブ・ザ・タイムズ 1892年8月8日)

Good Way Series 研究 1-1



黙示録 18 章の御使と 1888 年のメッセージ

「この後、わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た。地は彼の栄光によって明るくされた」(黙示録 18:1)。

地上でご自分の働きを終わらせるために、神は三つのメッセージ(黙示録 14 章)をわたしたちに与えてくださいました。それによってわたしたちが主の大いなる日に立つ準備ができなければなりません。それらは今日のための現代の真理です。わたしたちがこれらのメッセージをどのように取り扱うかが、神のみ前に自分たちの立場を決定し、救いか滅びか自分の運命を決めるのです。「このメッセージを真に理解することが非常に重要だ。魂の運命は、このメッセージをどう受け入れるかにかかっている」(初代文集 420)。黙示録 14 章は、大欺瞞者が特別な関心を持っている明らかに生死にかかわる問題です。事実、彼はわたしたちが現代の真理の確実な理解を弱めようと最善を尽くしています。「サタンは絶えずこれらのメッセージに影を投げかけようとしている。こうして、神の民がその重要性和、時と、場所をはつきりと識別しないようになるためである」(教会への証 6 卷 18)。そして不幸なことに、彼は神の民だと公言する人々の間で大いに成功を取ってきたのです。

I-なぜ黙示録 18 章の御使が来なければならなかったのか

「サタンは第三天使のメッセージの宣布が拘束されるような事態を考案してきた。わたしたちは彼の計画と方法に注意しなければならない。真理の聲が抑えられたり、この時代のためのメッセージが弱められるようなことがあってはならない。第三天使のメッセージは強められ、確認されなければならない。黙示録 18 章は、真理が抑えた言葉ではなく、大胆に力をもって提示される重要性を明ら

かにしている。…第三天使のメッセージを宣布するのにまわりの藪をたたくようなやり方が多くなされてきた。メッセージはしかるべきほど、はっきりと明瞭に伝えられてこなかった」(伝道 230)。

「第三天使のメッセージは力をもって宣布されなければならない。第一、第二のメッセージの宣布の力は、第三においていっそう強化されなければならない。黙示録の中でヨハネは第三天使に結合する天の御使について次のように述べている。『この後、わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た。地は彼の栄光によって明るくされた。彼は力強い声で叫んで言った』(黙示録 18:1, 2)。わたしたちは第三天使のメッセージをあまりにも漠然としたやり方で伝えるために人々に印象を残さない危険性がある。あまりに多くの他の関心事が持ち込まれて、力をもって宣布されるべきメッセージそのものが抑えられ、声のないものになっている」(教会への証 6 巻 60)。

「黙示録 18 章であらかじめ述べられている通り、第三天使のメッセージは獣とその像に対する最後の警告を伝える人々によって大いなる力をもって宣布されなければならない。[黙示録 18:1-6 引用]。これは第三天使の大いなる叫びにおいて響き渡るべき、神に与えられたメッセージである。…第三天使のメッセージを宣布するときに熱心であった多くの人々が今や気乗りせず無関心になってしまったことは厳粛にして恐るべき真実である! 世俗とクリスチャンだと公言する多くの人々の間の境界線はほとんど見分けがつかない。かつては熱心であったアドベンチストの多くは世に、その習わし、習慣、利己心に順応しつつあり、教会はますます不法において世と近く結びついている。日々教会は世に改心しているのである」(教会への証 8 巻 118, 119)。

E.G. ホワイトによれば、黙示録 18 章の御使は、必要とされる強化をもたらすのです。

「わたしは、…もう一人の力の強い天使が地上へ下って第三天使と声を合わせ、そのメッセージに力と勢いを与えるように、任務を受けているのを見た」(初代文集 448)。

「サタンは民としてわたしたちの間に、わたしたちをいさめ、譴責するものが何も入ってこないようにあらゆる手段を講じてきた。しかしここに神の契約の箱を担う民がいる。…彼らは主の言葉を宣布する。彼らは自分たちの声をラッパのように上げる。真理は彼らの手のうちにあってその力が減じたり、失われたりすることがない。彼らは民にその不法を示し、ヤコブの家にその罪を示すのである」(牧師への証 411)。

常に重要なことでした。他のすべてのものは、みなそれに依存（いぞん）しているのです。

皆さんは、神さまが美しい世界を造り、そこを生きた被造物（ひそうぶつ：造られたもの）で満たそうと計画しておられたこと、そしてそれらがみな呼吸するための空気を必要としていることがおわかりになるでしょう。

このお方は鳥も造ろうとしておられました。そして彼らも飛ぶための空気が必要となるのです。それがなければ、彼らは飛ぶことができないのでした。

神さまはまた、木や植物やお花を造ろうとしておられました。そしてそれらが成長するためには窒素（ちっそ）が必要になることをご存じでした。ですから、神さまはそれを酸素（さんそ）と混ぜて空気をお造りになりました。ちょうどそれぞれを正しい量で混ぜられたのです。多すぎもせず、少なすぎもしませんでした。もし神さまが酸素を少なく混ぜてしまったら、神様の造られたすべてのものが窒息（ちっそく）してしまったことでしょう。もし多く混ぜすぎてしまったら、一回の火花で世界中が火事になったことでしょう。

神さまにはまだ他にまず空気を造られた理由がありました。それは水を「上」、つまり雲の中と、「下」、つまり大海の中にわけるためでした。空気はそれらの間の防壁（ぼうへき）となるのでした。それがなければ、何マイルもの高さにある雲から雨がふるとき、マシンガンの銃弾（じゅうだん）のように地を撃（う）ったことでしょう。そして、一度のどしゃぶりで、すべてのものを破壊してしまったことでしょう。

だいこん餅

■材料

大根	500 グラム
塩昆布	25 グラム
薄力粉	大さじ 5
片栗粉	大さじ 5
ネギ	1 / 2 本
ごま油	適量

■作り方

1. 大根を野菜スライサーで細切りにします。
2. ネギをみじん切りにして、大根に加えます。
3. 塩昆布も加えて混ぜます。
4. 薄力粉と片栗粉を加えて、全体によく混ぜます。
5. フライパンにごま油をしいて、具材を広げて中火にし、ふたをします。
6. お好み焼きのように両面を焼きあげて、出来上がりです。

焼いた後、切って、一つ一つを焼き直すと、カリカリが増します。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。



書籍

【永遠の真理】 聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】 は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



聖書物語

パート1 第5話

大いなる準備(1)

地の第一日目の光がやみに消えていったとき、何か奇妙なすばらしいことが起こり始めました。静かに、神秘的に、濃い湿気をたっぷりと含んだ霧が、大海近くをおおっていましたが、上り始めました。一晩中、そして翌朝も、それはどんどん上がっていき、ついに世界の上を高く羊の毛のように白くて美しいおおいになりました。それと下にある水の間には、きれいで新鮮な空気があり、「大気」、つまり聖書のいう「おおぞら」ができました。

「神はまた言われた、『水の間におおぞらがあって、水と水とを分けよ』。そのようになった。神はおおぞらを造って、おおぞらの下の水とおおぞら

の上の水とを分けられた。神はそのおおぞらを天と名づけられた。夕となり、また朝となった。第二日である」(創世記 1:6-8)。

おそらく、みなさんはなぜ神さまが創造の一週間のうち、大気のように目に見えないものを造るのに、丸一日をかけられたのか、ふしぎに思っていることでしょう。このお方は海の魚を造るのに一日、動物を造るのに別の一日を使っておられたのですから。しかし、見えないからと言って、それらのものが重要ではないということではないのです。事実、神さまが第二日目になさったことは非



(39 ページに続く)